IS<インフィニット・ストラトス>～魂喰らう黒き花～

沢庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜～魂喰らう黒き花～

【Ｎコード】

Ｎ９９３７Ｖ

【作者名】

沢庵

【あらすじ】

ＩＳ…正式名称（インフィニット・ストラトス）。これは『女性』にしか反応しないもののはず・・・・・・・・・・・・だった。

これは三年前とある事件で行方不明になっていた本作主人公『八神裕哉』を中心に巻き起こる物語である・・・・・・

第一話：ＩＳ学園（前書き）

皆様お久しぶりです

アレコレ試行錯誤して、ようやく帰ってきました

まだまだ未熟者な作者ですが頑張っていきますのでよろしくお願いします

では、どうぞ～

第一話：ＩＳ学園

春・・・・・・それは終わりと始まりの象徴だとオレは思う

例えば会社の人事異動、例えば卒業と入学、出会いと別れ・・・

それはオレも例外はなく、やはり春という季節は特別なんだ

・・・例を挙げると、今日行われたと思う『ＩＳ学園』の入学式だ

何故そういう言い回しかというとオレはその入学式に出席していないからだ

というのもちょっとした諸事情があってやむを得ない事だったんだがな

まぁそんな事はさておいて、オレはそのＩＳ学園の敷地内にいて、現在校舎に向かって歩いているところだ

・・・何々？　学校の名前に含まれているその『ＩＳ』とは何かって？

仕方ない、一度もしか説明しないからよく聞いておけよ？

ＩＳ・・・正式名称『インフィニット・ストラトス』

元々宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだ

開発当初はあまり注目されなかったんだが、篠ノ之束博士ともう一人が起こした「白騎士事件」によって、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能を見せつけたことから、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用されることになった

だがそんな凄い物が軍事転用・・・最終的に戦争で使用される事に

なったら？

それはマズいと考えた各国はＩＳを『スポーツ』という枠組みに定着されている・・・まぁちょっと色々と抜け落ちた説明だったが、あながち間違いではないだろう

ついでだ、学園の説明もしよう

ＩＳ学園――――

ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行い義務を負う

ただし当然機関で得られた技術などは協定参加国全体が理解できる解決をする事を義務づける

また、入学に際して協定参加国の国籍を持つ者には無条件に開戸を開き、また日本国での生活を保障する事

これはＩＳ運営協定『ＩＳ操縦者育成機関について』と言うのにこう言う風に記してあるんだが、一番大事な所を掻い摘んで言うと、ＩＳ操縦者育成のための学校だと言う事

以上、説明終わり・・・・・っと、ようやく校舎が見えてきたな

・・・おっとそうだ、大事な事説明するの忘れてたな

ＩＳは女性にしか動かすことが出来ない

何故だかは未だに分かっていないが

・・・はっ？　女性にしか動かすことが出来ないのに何で男のお前がここにいるのかって？

まぁそう思うのは当然の事だろう

だがその話には続きがあって、今年の2月、ＩＳを動かした男が二人出てきたんだ

そしてその内の一人がこのオレ、八神裕哉というわけだ

だがオレの事に関しては情報がマスコミはおろか、政府にすら開示されていない

理由は・・・後で少し触れると思うので割愛させてもらう

つまり現時点ではまだ“一人しか現れていない”、こういう事になるな

・・・あっ、それと開示の件については本日学園と“ある企業”から発表される予定だ

（風当たりが強くなるのは確定だな）

そんな事を思いながらも校舎内に入り、職員室を目指して歩く

職員室で待っていると電話に出た人がそう言っていたからな

ただその担任が規格外と言うか、ここで教師をやってると思わせないような人だ

その人は受験の時の教官でもあったんだが・・・いや、正直思い出したくはないのでこの話しは止めよう・・っと、危うく目的地を通りすぎるところだった

オレは扉の前に行くと規則正しくノックを二回し「失礼します」と言って中に入った

中に入ると・・・

・・・・・・入ると・・・

・・・男性教師がいないってどういうことですか？

いや、クールでかっこいい女の先生なら一名程いるんだが・・・

にしても―――

（視線が突き刺さる・・・）

まぁいきなり入ってきたのが男ならそうなるのも頷けるが・・・数が多すぎる

これからずっとこの突き刺さるような視線を受けなければならないと思うと、行方眩ましたくなるんだが

・・・それよりも目的人物に接触しなければ

「諸事情で遅れた八神ですが、織斑千冬先生はいらっしゃいますか？」

織斑千冬・・・かつてＩＳの世界大会『モンド・グロッソ』で優勝した人で、元日本代表

さらには篠ノ之博士・・束さんとは幼なじみで、男でＩＳを動かしたもう１人の方の姉でもあり、オレもよくお世話になった人だ

「遅い、もうＨＲが始まっているんだぞ？　もっと早く来れないのか」

と手厳しい感じで言ってきた人がいた

黒いレディースのスーツ、黒髪ロングで赤茶げた目、軍人さんのようなオーラを纏っていて、付けられたあだ名が鬼教官・・・スイマセン、冗談なのでその“熊も怯えて逃げるような目”はやめてください

「すみません、愛機の修理が今朝終わったと聞きまして、寄ってから来ました一応連絡をいれたはずですが、お聞きでないですか？」

空港に着いた際に連絡をいれたはずなんだが

「いや、聞いていたんだが・・・まあいい」

「？」

「それよりも行くぞ、時間が押しているからな」

「了解、それでは失礼しました」

オレはそう言って千冬さんと職員室を出た

「先程は言いませんでしたが、千冬さん、お久し振りです」

クラスに向かっている最中、オレはそう切り出した

「ああ、２ヶ月振りだな・・・・・・お前は何をしていたんだ？」

何をしてたか、か

「テストパイロットの仕事に武器の設計等を、後はまぁ・・これからの事を考えてました」

これからの事というのは主に幼なじみの事についてや記者会見の事などだな

まあ記者会見って何ぞや？って思う人もいるだろう

もちろん男でＩＳを動かした、その事もある

先ほど口にした“ある企業”や“テストパイロット”、これも関係している

このある企業とは両親の親友が経営している会社で、かなりお世話になっていたんだ

まぁそれから色々あった故にテストパイロットの仕事を受け持っている

「そうか・・・・・・まあなんだ、悩みがあれば相談に乗ってやる」

前を歩いている千冬さんはそう言った

・・・その意味合いは一介の教師として、そして友人の姉としての2つのものを感じた

「・・・はい、ありがとうございます」

「・・・・・・。さてここがお前が入るクラスだ」

・・話を反らし・・・って、もう着いたのか

「さて、私は中に入るが八神は呼ばれるまで待機だ、いいな」

「了解です」

そう言うと織斑先生は教室の中に入っていった

・・・ふぅ

（小学校中退のオレが高校生、か・・・）

思えば学生生活も3年振りだな

それに中にいる一夏やクラスメート達はどう思うだろうか？

・・・・

未だに行方不明の奴がＩＳを動かせるようになって帰ってきたなんて・・・な

『パアンッ！』

ん？

何か聞こえたような・・・

そう思っていると――――

『パアンッ！』

また音が聞こえた

しかもいい感じの音だ

すると今度は――――

『キャーーーーー！！』

「！？」

な、何だ？

教室内から聞こえたが・・・・・・一体中で何が起こっているんだ？

てか織斑先生が教室に入ってから上のような事象が起こっているんだが・・・千冬さん、貴女一体何をした

『よし、では入ってこい』

とそこで織斑先生からお呼びがかかった

（さて、では逝くか）

この先に進めばきっと色々問い詰められるんだろうなと思う・・・

だがそこはまぁ・・・会見前の予行演習だと思えば多少は何とかなる・・・よな？

そんな感じで不安と若干の恐怖にに駆られながらオレは一歩踏み出した

？side～

「以上です」

がたたっ。思わずずっこける女子が数名いた。どんだけ期待してるんだよ。無茶言うな

「あ、あのー・・・・・・・・・」

背後からかけられる声。涙声成分が二割増している。

（え？あれ？ダメでした？）

そう思っていると――

パアンッ！

いきなり頭を叩かれた

「いっ――――！？」

痛い、と言う無脊椎反射より、あることが頭をよぎった

この叩き方ー威力といい、角度といい、速度といい・・・

俺はある人物が頭に浮かんだ

「・・・・・・」

おそるおそる振り向くと――――っ！？

「げぇっ、関羽！？」

パアンッ！

ぐあっ！？

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

俺、織斑一夏の唯一の家族で姉の織斑千冬がそこにいた

「あ、織斑先生・・・と言うことは？」

「あぁ、外で待っているよ。それよりもクラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

外で待っている？何の事だ？

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・・・・・・・・」

「そうか・・・・・・・さて」

そう言うと千冬姉は俺ら生徒の方を向いた

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い者になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

な、なんという暴力宣言

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声が響いた

「キャ――――――――――！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや別に南北海道でもいいけどさ

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

おいおい、頼むから我が姉のために死ぬなんて止めてくれ

そしてそれを聞いた千冬姉はかなりうっとうしそうな顔で見る

「・・・・・・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

罵ったように千冬姉は言った

だが――――

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうやらこのクラスの女子はＭな人が一部いるみたいだ

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――――」

パアンッ！本日三度目。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ

「織斑先生と呼べ」

「・・・・・・はい、織斑先生」

――――と、このやりとりで次に起こる事は容易に想像ができた

「え・・・・・・・・・・・・？織斑くんって、あの千冬様の弟・・・・・・？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を使えるっていうのも、それが関係して・・・・・・・・・」

と、がやがや騒ぐ女子達

「お前ら静かにしろ・・・そろそろいいだろう、山田先生」

「あっ、はい」

ん？何があるんだ？

「えっとですね、実はちょっとした諸事情で入学式に遅れてた子がいたんですが、織斑先生の話ではもう来てるそうなんです」

入学式に遅れてた子・・・？

「・・・ああ、椅子が1つ空いていた席の子ね」

「ちょうど真ん中の列の真ん中辺りが空いてると思ったら・・・へぇ、そうなんだ」

オレを含めたみんなの視線がそのポツンと空いている席に向いた

「そうだ・・・まぁ驚くのも無理はないと思うが、あまり騒ぐなよ、というか騒ぐな」

何だ?千冬姉がそこまでいうなんて・・・どこかのアイドルか?

「・・・よし、では入ってこい」

織斑先生がそう言うと、教室のドアが開いた

そこから入ってきたのは・・・・・・・・はっ？

「八神裕哉だ。そこにいる織斑一夏と同じでＩＳを動かすことが出来る者だ。

特技は剣術とピアノ、家事全般だな・・・まぁ色々あると思うがよろしく頼む」

そう言うとソイツはお辞儀をした

『キ』

「キ？」

『キャ――――――――――――！？』

「イケメンよ！」

「しかも眼帯付けててカッコイイ！」

・・・またしても黄色い声が上がった

「一夏・・・久しぶりだな」

一般の男子の身長よりも高く、大まかに見積もって１７７ｃｍぐらいの、体格のいい体

一般の男子より少し低めの落ち着きのある、優しく、且つ力強い声

顔は右目に眼帯がかけられていて、幾多の困難を乗り越えてきたような感じの、今風のかっこいいアーティストみたいなのとはまた違った感じのかっこよさを秘めた顔

ショートヘアだった黒髪は今は肩より少し伸ばした辺りで後ろで結っている

唯一変わってないのは、眼帯をしていない方のソイツの目は、俺の憧れた、強くて優しい目を持ったあの時と同じ紅い目だった

「裕哉・・・・・・なのか？」

「おう」

三年前、行方不明になっていた俺の親友、八神裕哉の姿がそこにあった・・・・・・・・・・・・・・・

第一話：ＩＳ学園（後書き）

・・・すみません、後半使いまわしました

プロローグカットして一話からでしたが・・・いかがだったでしょうか？

前に投稿した二つとほぼ同じ内容ですが・・・

とまぁここまでにして、次回またお会いしましょう

それでは！

第二話：親友と幼馴染（前書き）

え～と、皆様、お久しぶりです

二ヶ月もの間を空けてしまい申し訳ありませんでした

つい先日まで国家公務員の一番簡単な試験の勉強をしていまして・・・

・申し訳ありませんでした

相変わらずの不定期更新となりそうですがよろしくお願いします

第二話：親友と幼馴染

どうも、八神裕哉だ

あれから時間は少し飛んで、先程１限目の授業が終わった所だ

授業中は……まあ騒ぎっぱなしだったとでも言っておこう

『八神』と言う名字に何名か気が付き、“あの事件”の当事者だというのと、何故ここにいるのかで騒いでいたのだ

まぁ後半の件は少し経ってから気付いたらしい

考えれば直ぐに出ることだからな

ここはＩＳ学園、ＩＳ操縦者育成のために作られた学校だ

無論ＩＳを動かせない人間が来る場所ではない、というのが暗黙の了解だ

つまりオレがここにいるのはオレが男でＩＳを動かせる二人目の人間だという事

そういうイレギュラーなオレに現在進行形で一夏以上に視線を向けられているんだが……正直に言おう、辛いです

教室の外からも驚きの声とかなりの視線を感じるし……入学初日から挫けそうだ

「……お前も大変だな」

と前から声が掛かった

「……まぁそうだろう。あんな事件が起きてもう3年、行方不明になっていた人間がＩＳを動かせるようになって戻ってきたんだからな」

騒がない方がおかしいだろう

「……一夏や千冬さんには頭が上がらないよ」

そう、話しかけてきたのは小学校の時からの親友で担任の千冬さんの弟、織斑一夏だった
特に織斑姉弟には心配をかけた事と辛い思いをさせた事
その他諸々にな

「……実は千冬姉から聞いてたんだよ……『彼奴が戻ってきた』ってな」

・・・と言うと入学試験の時か
あの時はあの人に頼んで織斑先生に連絡を取ったんだよな
・・・試験会場で再開したときは・・・・・死ぬかと思ったな
しかし成る程、だからあまり驚いてなかったのか・・・
まぁ一夏には話すなとは一言も言ってないからな

「そうか……すまなかった」

オレは一夏に深く頭を下げた

「……本当ならとやかく言ってやりたいんだが……また、よろしく頼むぞ……相棒」

そう言って一夏は手を差し伸べてきた

……本当にコイツは優しすぎるよ

だがそんな一夏だからオレはスゴいと思える

「……おう」

そう言ってお互いの手を組むような形で取った

……のはいいんだが

（何か……一つだけ他と違う視線がするような……）

もっと言うと一夏と話している時からか？

・・・いや、教室内の女子全員の視線をオレ達浴びているんだけど、その中で暖かく見守られているような視線を感じるんだ

オレはその視線のする方を向くと……ん？

（まさか……箒、か？）

黒に近い茶色のポニーテール、鋭い目、そして何より『和』と言う文字がピタリと合う……侍？　そんな雰囲気がする女子生徒がいた

その女子生徒と視線が合った

女子生徒と視線が合うとその子は真っ直ぐオレ達がいるところへ歩いてきた

「……ちょっといいか？」

開口一番がその一言だった

「あ、ああ……」

「……オレはパス、二人だけで行ってこい」

一夏は曖昧な返事で、オレはキッパリと断った

「お前も来い」

「当初の予定は“二人きりで”という事だったんだろ？オレの事は後で話せる範囲で話してやるから……行ってこい」

その女子生徒に強調するところを強く言って意識させた

幼なじみの恋は応援してあげたいからな

「……す、すまない／／／」

女子生徒は照れているのか顔を赤くしていた

可愛らしいな、まったく

「いいから行けよ」

「ああ、一夏、行くぞ」

「お、おう……裕哉、また後で」

「ああ」

そう言うと女子生徒は一夏を引っ張って教室から出ていった

……ふぅ

（六年も会わない内に綺麗になったな、箒）

流石はあの人の妹だとつくづく思う

……鋭い目は相変わらずだけどな

ついそう思ってしまった

「ゆーくん」

突然後ろからのほほんとした声が掛かった

とりあえずオレは振り替える

「……やっぱり本音か」

「そうだよ～、久し振り～」

振り返った先にいたのは家同士で古くからお付き合いがある更識家、その付き人の家系の布仏家次女、小豆色の髪とやたらと長い制服の袖が特徴的な布仏本音だった

「ああ、二ヶ月振りだな」

丁度極秘で受験に来ていた時に何処からか情報を掴んでいた麗しのお姉様？に待ち伏せされていて、生徒会室に連行された時にばったりと再開したと言う訳さ

「えっ、何々？八神君と布仏さんってどんな関係？」

今の会話を聞いていた女子がそう聞いてきた

「確かに、布仏さん八神君の事を『ゆーくん』って呼んでいたし」

「もしかして恋人とか？」

……いやいや

「本音とは幼なじみだよ」

『……幼なじみ！？』

……き、興味津々なのは分かるが

「何も全員反応しなくても……」

つか教室の外からも聞こえてくるってどんだけだよ……

オレ怖いんだけど

それから少し本音と周りの女子数名を交えて話した後二限が始まる

時間になったのでオレは女子に早く席についた方がいいと促した

現に――――

スパーンッ！

織斑先生の出席簿が遅刻者に火を吹いたから

そんな事があって現在二限目、教鞭は山田先生が執っている

織斑先生は監督みたいな感じで教室の端の方で腕を組んで聞いている

今の時間はＩＳの運用に関する話を山田先生が丁寧に教えている

・・・ふむ、確かに聞いていてすごく分かりやすいと思う

教え方が上手いというか重要な点はしっかりと抑えているというか・
・・山田先生は出来る先生だ
現に――――

「ゆーくん、先生の授業分かりやすいね～」

勉強があまり得意でない本音がそう言っているのだから山田先生の
教え方がどれだけ上手いか分かるだろう
・・・初歩的な所だからかもしれないが
だがそんな初歩的な所から分かってなさそうな奴がいた

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

山田先生は一夏にそう聞いていた
そう、先程からソワソワして隣の席の女子をジッと見つめている馬
鹿がな

「あ、えっと・・・・・・」

「わからないところがあったら先生に訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

・・・こう言っては何だが、山田先生が逞しく見える

流石は教師、というか山田先生だな

「先生！」

「はい、織斑くん！」

・・・何この掛け合い

聞いている方が恥ずかしいんですけど・・・

「ほとんど全部わかりません」

・・・はい？

「え・・・・・・。ぜ、全部、ですか・・・・・・・？」

流石の山田先生も戸惑っている

それはそうだろう、生徒全員に分かりやすく教えているはずなのに
全く分からない奴がいるとは思っても見なかっただろう

「え、えっと・・・・・・織斑くん以外で、今の段階でわからない
っていう人はどれくらいいますか？」

そう言って生徒に挙手を促すが案の定分からないのは一夏だけだった

「や、八神くんはどうですか？」

山田先生は恐る恐るオレに聞いてきた

男のオレも同じだったらどうしよう

そう心の声が聞こえてきそうな表情を山田先生はしていた

「問題ないです。入学前に内容は完璧に覚えてきましたし、それに山田先生の教え方はとても丁寧で分かりやすいですから」

微笑んで山田先生にそう言った

一夏のせいで自信をなくされては困るので励ましの言葉を送っておくことを忘れずに、な

「わ、分かりやすいですか？先生の授業？」

「はい、とっても」

一夏を見てみれば唖然としていた

・・・お前は自業自得だろ？

それも恐らく入学前に学校から配布されたタ〇ンページ並みの参考書を読まずに捨てた、とかか？

まぁ流石にそれはないと思いたいがな

「・・・・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

ふと教室の端で控えていた織斑先生が一夏に聞いていた

一夏は――――

「古い電話帳と間違えて捨てました」

・・・・・・オイ

そこで織斑先生の必殺技『出席簿』が炸裂した

「必読と書いてあっただろう馬鹿者」

全くだ、必読と書いてあるものをどうして捨てられるのか理解できない

・・・電話帳と思ったのは同感だが

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと・・・・・・」

「やれと言っている」

・・・・・・鬼だ、と織斑先生に言ってやりたいが、一夏が自分で巻いた種だ

勉強に付いていけるように頑張ってもらうしかない

「・・・・・・はい。やります」

・・・何か不憫だな

自業自得と言えばそれまでだが、やはり相棒の身としてはどうにかしてやりたいと思う

（・・・基礎ぐらいは教えてやるか）

そんな事を思いながら一夏にでも分かる授業プランを密かに練っていた二限だった・・・・・

第二話：親友と幼馴染（後書き）

・・・なんかグダグダしててすいません

久々に執筆するとどうも上手く書けませんね

私の場合はいつもですが

さて、次回はあの人の登場です

以前書いていた作品と趣向を変えていますが・・・正直不安です

ではまた次回お会いしましょう

それでは！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9937v/

IS<インフィニット・ストラトス>〜魂喰らう黒き花〜

2011年10月29日01時23分発行